



Die Eiche ティ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

Eiche

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町2-518-1 第二ワールド ナーシング ホーム内
TEL 047-461-9111 FAX 047-461-7010

2001年 年次総会開催



公園中のステュッカー公使、左は田口さん



前列着席者 左より花井理事、平尾顧問、公使
林理事長、前田秘書、加藤会長夫人

平成13年4月21日(土)PM3時45分～

於ホテルオークラレストラン「桃源」32名

本年の年次総会は、例年より早い4月21日に昨年同様千葉そごう健康保険管理センターの水野さんのご紹介により10階ホテルオークラレストラン「桃源」にて開催された。宮藤理事の司会の下、本年は加藤会長の体調不良のため、国枝副会長が開会の挨拶後、鈴木淑弘理事を議長に選出して、逝去された玉置名誉会長、高浦監事に黙祷を捧げた後、副会長から昨年度の事業報告、下川さんから決算報告、丸山監事より監査報告が行われ、更に金谷専務理事より13年度事業計画・予算案提示が行われた。

又、執行部から公的会務遂行に際して発生する旅費、諸経費の一部を会費から補助する規定案が上程され、細則について再検討の上実施することとなった。

総会終了後、ドイツ大使館ステュッカー公使による「21世紀幕開けの日独関係」と題して記念講演が行われた。(通訳は大使館の田口さん) その後副会長及び加藤会長夫人の挨拶、名誉会員臼井日出男議員の前田秘書の挨拶、会員の桜田義孝衆院議員の祝電紹介の後、平尾顧問の乾杯で懇親会。

また、久々に出席した上篠御夫妻、伊藤治昌、水野春美、小泉幸一各会員の自己紹介が行われ、花井理事の挨拶で閉会。帰りに「オリゴのおかげ」の土産が配布された。

「二十一世紀の幕開けと日独関係」

フォルクマー・ステュッカー・ドイツ連邦共和国公使

日独両国は、いくつかの共通点がある。即ち、両国は共に民主主義国家であり、市場経済国家であり、サミット参加国でもあるが、国連の常任理事にはなっていない。又、両国とも第二次大戦で敗れたが急速な復興を遂げ、平和により勝利を得た。

最近、ヨシユカ・フィツシャー外相が来日した際、河野洋平外相との間で「二十一世紀における日独関係―協力の七つの柱」という文書に合意した。七つの柱とは、七つの分野の事であり、それぞれの分野毎に協力のための課題と関係機関が明記されている。そしてこの中で活発な活動を行う市民や団体の、日独関係の重要な担い手としての役割が強調されている。

ところで、日独両国の政治関係は将来、より重要性が増すと思われる二つの傾向に対応している。即ち第一にドイツはヨーロッパへの統合を強化している。つまり二〇〇二年よりドイツマルクはユーロに切り替えられ、日本の観光客はどの国でも同一通貨を使える事になる。

この動きは、外交・安全保障政策・防衛政策等についても同様である。つまり欧州は一つの声を発して行こうという事であるが、かといって欧州各国がそれぞれのアイデンティティをなくすのではない。第二に、グローバル化の時代においては各国間の枠組みが重要になってくる。

例えば、日独はサミット参加国として、一昨年はドイツ、去年は日本が議長国として協力したが、今後国連改革でも日独両国が常任理事国となつて協力すべきである。

また、観光の分野での協力も考えられる。最近ベルリンへの日本人観光客は急増、回転寿司も多く開店、中心部にはソニーセンターも出来た。今後は去年十二月から実施されたワーキングホリデー・プログラムの下、若者の交流を活性化させたり、要人の相互訪問を推進(昨年シュレダー首相、フィツシャー外相が、又近々ティールゼ国会議長が来日予定、更に経済交流を積極化させていきたいと思う)文化交流については、日独は地理的に離れているが、互いの文化には親近感を抱いている。昨年は「ドイツにおける日本年」が実施され大変好評であった。

最後になったが、現在の日独関係を象徴する出来事は、ベルリンの在独日本大使館の改築が終わった事と、東京のドイツ大使館の耐震性の問題から六月には改築が始まる事である。それぞれの新しい大使館を通じ、お互いの絆をより強くしてゆきたいと考える。

リューネブルグ訪問記

—1000年の歴史の町で<第九>を歌う—

当協会理事・全日本<第九>を歌う会副会長

鈴木 淑弘

訃報

当協会加藤吉昭会長は4月28日多発性脳梗塞の為、逝去されました。又、監事高浦悦二氏は1月22日に肝臓癌の為、逝去されました。

謹んで御冥福をお祈り致します。

～平成13年度活動計画～

- ◆ 4月21日 第6回総会
- ◆ 5月19日 料理教室(於船橋市東部公民館)
- ◆ 7月 工場見学会(共催:湘南日独協会)
- ◆ 9月 講演会とビール祭(於タタンカ)
- ◆ 10月13日 ドイツ留学生交歓会バス旅行
- ◆ 11月 ドイツ軍人慰霊碑参拝
- ◆ 12月 日独協会 クリスマスの集い
- ◆ 2月1日 豆まき
- ◆ 2～3月 会員交流会

料理教室—ふれあいクッキング

当協会初めての料理教室。数社のスポンサーの食材提供で格安の会費により、短時間で出来る料理を楽しく紹介してもらいます。

- 日時: 5月19日(土) 13:30~16:30
- 場所: 船橋東部公民館(JR津田沼駅東口3分 西友先右折) Tel:047-477-7171
- 会費: 700円
- 申込: 同封のハガキにて(先着27名のみ)

ドイツ語船橋教室の御案内

4月より日独協会主催の代りに、当協会協賛で下記の通り、有志で運営されております。

- 場所: サミット・アカデミア
(JR西船橋駅前早稲田予備校5F)
- 時間: 毎週土曜 10:00a.m.~12:10p.m.
- レベル: 中級
- 授業料: 20週(40時間)・・・ 50,000円
10週(20時間)・・・ 25,000円
- 連絡先: 伊藤誠一氏(当協会会員)
Tel: 047-385-9380

リューネブルグ市立劇場で第九を熱唱



本年2月、たった3日間であったが、北ドイツのリューネブルグ市を訪問しベートーヴェンの<第九>を日独合同で歌う機会に恵まれた。「第九里帰り公演」と命名されたこの演奏会は「塩」の縁で結ばれた徳島県鳴門市とリューネブルグ市により企画されたが、そこには次の様な歴史が秘められていた。

大正3年のサラエボ事件がきっかけとなり勃発した第一次世界大戦時、日本は<日英同盟>の遵守などを名目に参戦し、当時ドイツが中国より租借していた遼東半島の青島をイギリスとの連合軍により二ヶ月余りで攻略した。青島を占領した約5000のドイツ軍将兵は俘虜となり四年半にわたって日本国内に収容された。俘虜収容所は習志野をはじめ全国に8ヶ所あったが、その一つが現在は鳴門市に属している板東俘虜収容所であった。

この収容所の所長は旧会津藩出身の松江豊寿大佐であったが、彼の祖父達は明治維新時幕府側であったため冷遇され、塗炭の苦しみを味わった。そのような事もあり、大佐の俘虜に対する扱いは「武士の情」と「博愛の精神」によって行われ、後に収容所を調査したアメリカ国務省のウェルズ次官から『史上かつてない人道的な収容所』と高く評価された。

俘虜達はこうした状況下で音楽・演劇をはじめ橋の築造にいたるまで様々な文化活動や事業を行い、大正7年6月1日、ベートーヴェンの「第九交響曲」が演奏された。この「第九」は日本における初演奏でもあった。

時は流れ昭和57年5月15日、市制35周年を迎えた鳴門市は鳴門市文化会館落成を記念し市民による<第九>演奏会を開催。姉妹都市リューネブルグ市の市長をはじめ市民代表も参加し大成功を収め、板東収容所の<第九>と共に語り伝えられる事となった。以来鳴門市では6月1日を<第九の日>と定め、その後毎年この日に最も近い日曜日に<第九>の演奏を行ってきた。そして平成元年(1989)には「全日本<第九>を歌う会連合会」を発足させ、本年6月には第20回の演奏会が催される事となっている。

さて、平成13年2月7日<里帰り公演>に参加する亀井俊明鳴門市市長を団長とする市民と全国の<第九>合唱団の有志約100人は関西空港を出発。リューネブルグ市はハンブルグから車で1時間ほどの、1000年の歴史を持つ製塩の町である。ホテルから眺めるとオレンジ色の瓦で統一された住宅街は白樺や松などの林で囲まれ静かで落ち着いたたたずまいであった。旧市街地は今時大戦でも爆撃などを受けなかったため中世をおもわせる古い建築物であふれ、レセプション等に行われた市庁舎は500年以上の歴史を持ち、庁内には小規模とはいえ裁判所や囚人を入れる牢屋などもあった。中央の広場から周囲を見渡すと教会の塔が見え、中でも聖ミカエル教会は壮大でかつミサを告げる鐘の音も美しかった。

今回の<第九>は市始って以来2回目の演奏との事で、2月9日の夜10時過ぎに終了したにもかかわらずその後の市民の興奮と歓迎は大変なものであった。聴衆の中には板東収容所の子孫の方々もおられ、国と国の犯した悲劇を市民の交流で善なるものに変えた一瞬でもあった。

—1000年の歴史の都市(まち)で高らかに

我ら歓喜の<第九>唱えり—



終演後の交流パーティーにて、左端鈴木氏